

11月18日(火)、高校1年生が「KPC+ Grade1」を行いました。「KPC」とは、「協創プレゼンテーションコンテスト」のことですが、外国語部門と日本語部門に各クラス代表の16名が参加しました。外国語部門のテーマは「居心地のいい場所から踏み出して挑戦すること」。海外(タンザニア、ニュージーランド)への留学を通じて挑戦したことを紹介するなど、内容、表現ともにレベルの高さを感じました。日本語部門のテーマは「身近な話題から」。「私の祖母」「私たちとスマホの複雑な関係」「私たちが戦争を知らないために」など、身近な人について取り上げたり、ジェンダー問題や平和教育のあり方について一石を投げたりする内容など、甲乙つけがたい発表となりました。それぞれで金賞を受賞した生徒は、年明け2月21日(土)に行われる「協創コンテスト」に出場することになります。



(「KPC+ Grade1」で、金・銀・銅賞を受賞した生徒たち)

習慣が生涯を左右する

生活習慣、学習習慣、運動習慣、睡眠習慣、喫煙習慣など、〇〇習慣と言われる言葉は数多くありますが、良きにつけ悪しきにつけ、習慣とは自然と体が反応する、動き出すことを指します。ゆえに、習慣によって身につけられたものは、その人にとって変容しがたい一つの行動特性となります。これまでも習慣化によって人間形成に影響を及ぼすことについて、拙稿において何度か伝えてきました。「良き習慣が自分を育む」、「習慣が変われば自分が変わる」、「ふり返りを丁寧に、習慣に」というテーマで記してきました。

以前、鶴学園なぎさ公園小学校に勤務していたとき、「なぎさサロン」という保護者向けにお話をする機会が各学期(前後期生)、学年ごとに設定されていました。13年前、1年生の保護者に次のようなことを話しました。「6歳までに身につけておきたい基本的生活習慣について話します。朝起きて、『おはようございます』と家族の方に挨拶が出来ていますか。言われたことに『はい』という明確な返事が出来ていますか。外出から帰ってきて『靴の脱ぎ揃え』(次に靴を履けるように)が出来ていますか。この3つの基本的生活習慣は、今後、人間形成に確実に役立ちます」と。「これからでも十分に間に合いますよ。やってみましょう。ちなみに、我が家は実践できなかったの、今、苦労しています」とオチをつけましたが……。

いずれにしても、年齢を重ねていくたびに備わっている習慣に対して一喜一憂することがあります。その習慣があったお陰で他者から好意的に見られたり、その習慣があったがゆえに後悔にさいなまれたりすることが再々訪れるからです。

さて、本校では「朝の10分間読書」を行っています。もう始めてから数年が経過します。先日、『日本教育新聞』(10月20日号)を読んでいると、次のような記事に出会いました。「社説」欄にあったのですが、

「秋と『朝の読書』 習慣が生涯を左右する」というタイトルで綴られていました

「(前略)学校で毎朝10分間、「朝の読書」を実践することで、読書習慣が身に付くことは、様々な事例で紹介されている。興味・関心がある本を自分で選び、落ち着いた環境で毎日読む。習慣となったものは、意識せずとも容易にできるようになる。

習慣は生涯を左右するほど大きな存在となり得る。朝の10分間を、児童・生徒のみならず、教員も一緒になって静寂の中で集中して読書にいそしむ。そこには学校の知的秩序が存在している。朝の読書という、良い習慣を通して人格の陶冶が期待される。

生成AIの深化で、より簡単かつ迅速に多くの情報を得られるようになったが、それはあくまでも外側にあるものである。内側にある知識は、能動的に『読む』ことによって培われる。

内側に取り入れられた情報は、『点』となり、点と点がつながり『線』となる。線と線がつながり『面』となり、面が重なり合って『立体』となる。

情報の点が、立体となることで知識となり、知ることから理解することへと深化していく。理解はさらに創造への力となっていこう。

読書を通して内側に取り入れられた『点』は、種ともいえる。一つのリングの中に、種が幾つあるかは数えればすぐ分かる。しかし、一粒の種から、幾つのリングが実るかは誰にも分からない。

たかが「朝の10分間読書」、されど「朝の10分間読書」です。この時間の生徒の様子を時折見に行きます。残念ですが、有効活用できていない生徒が散見されます。本校 LRC(図書室)には、34,837冊(文庫・新書含め)という蔵書があります。利用しない手はない。「読書は苦手」という悪しき習慣形成が、一度きりの人生でどれだけの損失につながるのか。